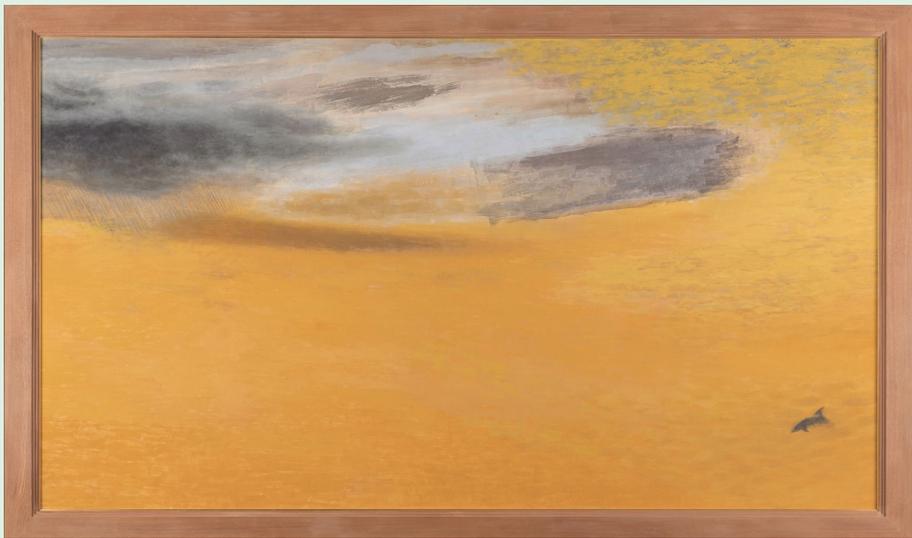


第6室 昭和の後半



秋野不矩「ガンガー(ガンジス河)」(あきのふく「がんがー(がんじすかわ)」。 静岡県立美術館蔵

びょうぶ かけじく かくそう
屏風や掛軸だけではなく、額装の日本画も、たくさんあります。

? 何をかいているかな?

近付いて見ると、、、 黄色い絵具がざらざらしているね。
何をかいているのかは、分かりづらいかも。

遠くから見ると、、、 「あ、大きな風景をかいているんだ」と分かります。
すごく高いところから見た風景だね。

近付いて見て、、、 きれいな色を味わったり、
遠くから見て、、、 雲の上から川を見下ろす大きな気分を味わったり、

見る距離によって、見え方も、楽しみ方も変わってくるね。

最後に

明治、大正、昭和、約120年にわたる日本画を見てきました。
最初の部屋の絵と、最後の部屋の絵、ちがうかな? 似たところもあったかな?

時代が変わると、かかれる絵も変わってきます。

今この時代に描かれている絵は、どんなものだろう?

昔の絵と比べてみると、その特色がよく分かるかもしれないよ。

これからも、美術館ではいろいろな作品を紹介しつづけます。また見に来てね。

近代の誘惑 — 日本画の実践

にほんが じっせん

静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

2023年2月18日[土]
3月26日[日]

大
さい

子どものためのガイド

この展覧会では、明治、大正、昭和にかかれた、“日本画”とよばれる絵を展示しています。おおよそ時代順に展示しているので、絵を見ながら約120年の時間旅行をしていきましょう。

? そもそも、日本画ってどういうもの?

明治時代になると、江戸時代とは、世の中が大きく変わりました。外国風の絵のかき方もくわしく知られるようになって、日本人で油絵を勉強する人も出てきました。そういう絵と区別して、日本の昔からの方法でかいた絵を、“日本画”とよぶようになりました。

第1室 明治の前半

鈴木松年「神武天皇・素戔嗚尊図屏風」(すずきしょうねん「じんむてんのう すさのおのみことずびょうぶ」) 個人蔵



神話に出てくる有名な神様・スサノオノミコトが、怪物ヤマタノオロチをやっつけるところ。



神武天皇たちが、山の中で道に迷ってこまっていたら、天からつかわされたヤタガラスが道を教えて助けてくれたところ。

右の絵を見てみよう ? ヤタガラス、どこにいるかな?

? どの人が神武天皇だろう?

ヒント：一番堂々として、グループの中心にいる人。画家は、絵を見る人がちゃんと分かるように主人公を描いてくれているよ!

明治時代には、それまでとはちがう、新しい国の仕組みが作られました。

「どういう国にするのがいいだろう?」ということが真げんに考えられるなかで、「そもそも日本ってどういう国?」と関心が高まり、日本の神話や歴史が注目されるようになりました。

第2室 明治の後半

下村観山・横山大観「日・月蓬萊山図」(しもむらかんざん・よこやまたいかん「じつ・げつほうらいざんず」) 静岡県立美術館蔵



こっちは7羽

ツルが5羽いるよ

伝説の霊山・蓬萊山

仙人が住んでいて、不老不死の薬があるそうです。おめでたい鳥、ツルも住んでいます。

最初の部屋にも、蓬萊山を描いた絵があったよ。比べてみてね。

新しい日本画のかき方を工夫しよう！という活動が活発になっていくのが、このころ。この絵の新しいチャレンジは、線をほとんど使わずに、もやとした色の面でかくところ。『空気をかくにはどうしたらいいだろう』というテーマのもとに考えられたかき方です。

? 空気が感じられるかな?

? 伝説の霊山の雰囲気は、どうだろう?

ちなみに...

このかき方は、あいまいでよく分からないな、という意味で「朦朧体」とよばれました。あまり評判は良くなかったみたいだね。

第3室 大正その1

尾竹竹坡「乳供養」(おたけちくは「ちちくよう」) 個人蔵



大正時代になると、人間の個性や自由といったものが大事にされるようになります。

日本画でも、個性的な表現が多く見られるようになります。

? 人物の顔に注目。どんな顔をしてる?

? 色の雰囲気がこれまで見てきた絵とはちがうみたい。どうちがうかな?

仏教のお釈迦様のエピソード
苦しい修行をやめて山を出たお釈迦様に、スジャーターさんが乳がゆをささげる場面です。

第4室 大正その2

線を使わずに、ぼんやりした色でかくところは、第2室の「日・月蓬萊山図」と近いかもしれません。でも、雰囲気は全然ちがいます。

? どういうところがちがうのかな?

? この絵も、やっぱり目に見えないものを表現しようとしているよ。何だと思う?

①音

②光

③空気

大正時代には、西洋の美術を直接見て勉強するために、外国に行く画家が増えました。

この絵を描いた入江波光さんも、ヨーロッパを旅行して、特にイタリアの古い絵に刺激を受けたそうです。

第5室 昭和の早いころ



松岡映丘「今昔ものがたり伊勢図」(まつおかえいきゅう「こんじゃくものがたりいせず」) 静岡県立美術館蔵

『今昔物語集』より

天皇からの使者として、藤原伊衡という人が、和歌の名人・伊勢のお屋敷を訪ねたところ

伊勢のお屋敷は、すみずみまでお手入れが行きとどいていたそうです。

? どこからそれが分かるかな? ヒント：人の周りの床を見てみて。

この絵は、昭和5年(1930年)、イタリアのローマで大きな日本画の展示会が開かれたときに展示されました。日本はこういう国ですよ、日本画とはこういう絵ですよ、と、外国の人にアピールしたかったのではないかな。とても気合いが入っています。